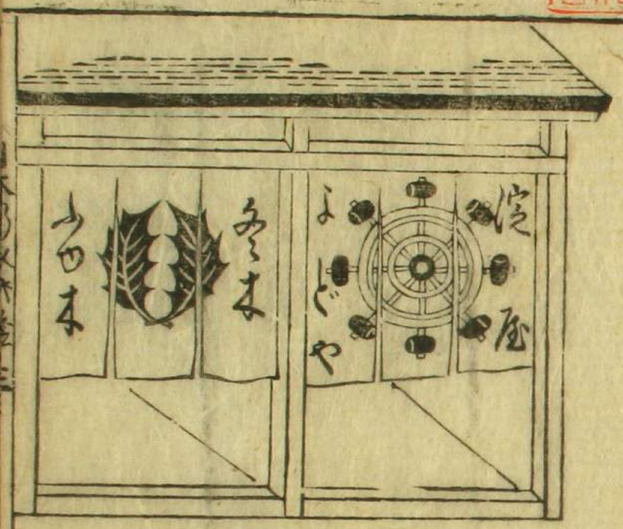
日本

新永代蔵

三

今世長者經

へ 13
2.063
3

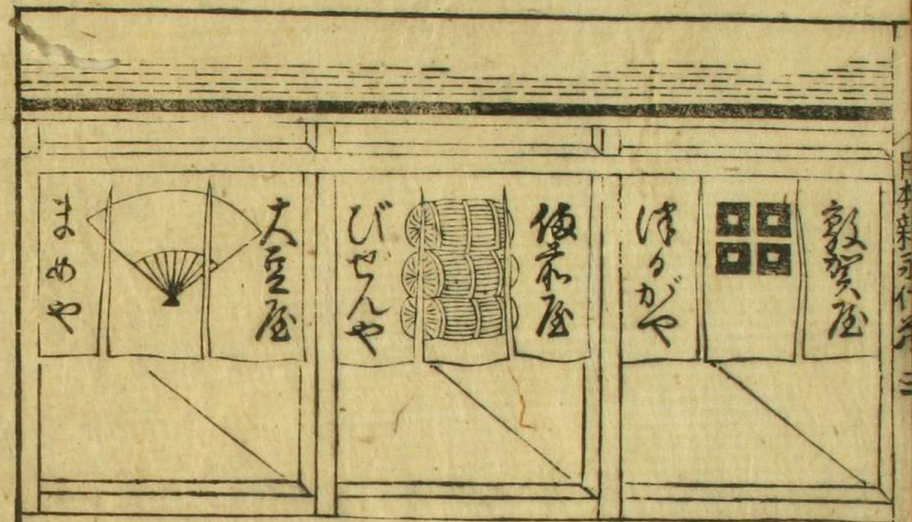


日本新永代蔵巻之三

目録

十二代限義し鶏の卵
淀の書籍る名代まぜもの
大坂よかられるき金の鶏屋
結仕金九十年のもくろ
栄ハ接木の梅邨と酒代雲霞
四方よかられるき大文神として
牧太夫

饗庭文庫



二色は古銀八匁大黒
産刀の袋のぐりつよく落まを
堪よかれなきこの判の切をするがや

正直は一端は未練商
浮世嵩はていそれは産業の業
難波よかれなきこの銀は器屋

外相りとにも貴国は懐
懐氣は寸半は表うらかへの長袋
京よかれなきの記は徳若屋

日本永代蔵巻之三

十二月銀は鶏は雪に

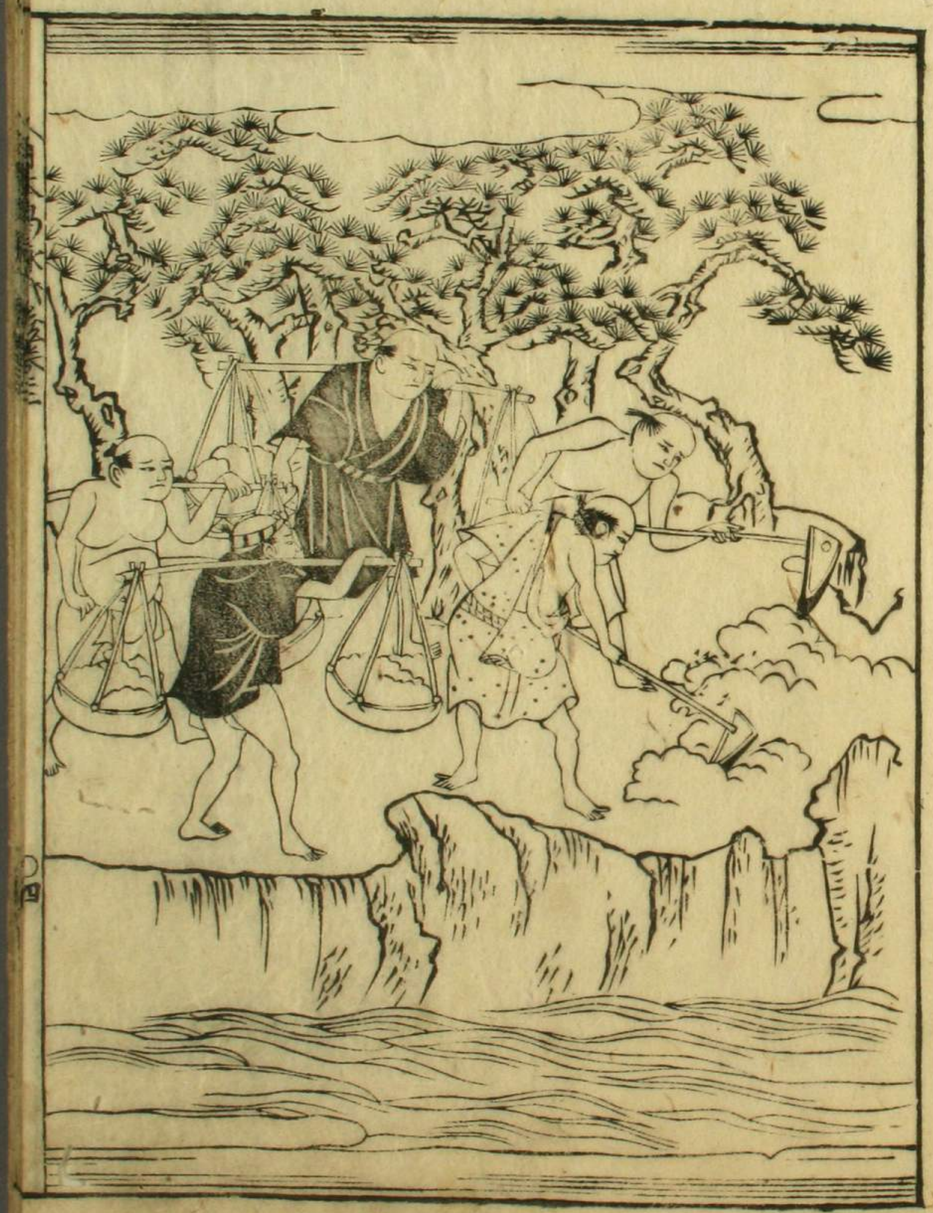
商人は根をおろそかにして外に氣は廣く持ちて前を
八幡の人にて俵屋盤屋の出世代淀屋を出蔵を結
願ふ男の才覚万人よすぐれて大分の金銀をもうけ
ぬ母を一代よ立ち別しそ孫よ名沢の名代きこすの人へ
名所なりしの品十八所乃長太を繁昌をなりもう
よ行ぐ心けわうこてを隅ぐ限ぐよ国のとぐくを
のよあう形ちうふ山男切のこそ並木乃松のそぐを
うこせのがのて撫うけらくやにこうくをよあがりて
ひとあよ東西をんてくをとよ賣情堪とをよろか

てトけをかいぬけるようにして六ヶ敷人の目をかすめ一人を
油断なくたくらまれだせるより換金ちがへさせ推
量せし諸方書信よりかの新をかりかたより出て漢
大川町にて反銭をかりあつめ淀屋三郎左衛門
代々金銀をもいて金銀ばかりにけかをかしてし
十二の銀箱四十七乃代物箱をいろはづけかしてはめて
ヒトヘ走なる物ハ賞返ていろをしお傷のわがるまでハ賣
ど三代以来ハ賞売乃ことなりし
を例銀店おつしの名物性よ付くへるだりしそ
箱をかりて代さへなりしをそしてよこそんをもて
を九四貫三百匁ほどいつ附八百六拾九貫しまりられる

方ゆうのをびろさしてを金銀のふくろ年古六箱
助をもつてそでたてぬ越ぶして賞売のちひ入商
人の家ようまもも若大くるる九分十分よハわ子ま元金
銀よをばく人招こてへで欲ぶて欲ちかりて人をもをもるこ
代淀屋のちろをもへ初てまれ事でしされ
を代長者乃家をほろぶる時ちやく代めの長義右卯
法神しして故郷といり代男酒嫁の性びよ命をなぶり
四十一才ゆてかりつ子庚丈卯よ月神を濡り故
見をを代勘七方ものの指当せよの当ちり賞よ
同町よ淀屋秋右衛ちて先代分のりうしして重縁と
ちり故郷といをしまもて の後才ち庚ちり大分の海

式どれて而穢分をせざる事代間ゆふくしてうを
ぶをつくろひ辰の年がうし弥五郎誕生一人ありて
ゆく七月極月の大勢を祝うとて宮せよといひるる
物ひうとうて勤七色を合点せずいうゆを分不肖ゆ私
主人の娘見ハいまだ十二年ゆり漬をもてめをもてり
辰の年辰ハいまだ十二年ゆり漬をもてめをもてり
の男蕊をゆくりやうよりとの事りとて さうとく男神
向よ勤づらいゆくいうかしで十二や十三の男兵衛が秋辰
傾城ぐらひ殺さるべきやうなり親兵衛い男神お遊と
ハやはりながら年中の極和午黄月余色ハ赤をもなれど
の事りとて今年お果らるくまでハ吳ゆくゆくゆくゆ

極和つもお出よて今年辰の年辰を若よりさるべん
をもとの事ぐうとと理屈よりつまりと秋辰西暦よりつまりと
うく男たび辰の年辰ハ兄有りてい事く親故歌い根
をもあて極びゆく男神の濃りよ如ゆどのるハ分りしゆ
中くゆ事ぐうさい辰の年辰ずつを方根兄をもあゆせ
てをもよあくくもて大坂一番といるる浪屋の娘で滅亡
さすゆとゆで勤七らるつ宮月のお氣づいるる物ゆうし
ろうを仕ろうゆい辰の年辰を世るの人よいびとさとど人
兵兄事よ男神ハ親兵衛の代より一倍ゆして世間よう
ろんいりゆをそれで兄ん之をふといどをゆいて色より二家
業絶くゆ不通よりり秋辰ハ和夕辰の年辰よりそよ



と同じくらゐ　さずわれ　仕給　をせよ　と　動七
あが　玄　潤法　ゆり　と　世弘　へ　いふ　して　淀屋の門を　通お
し　秋月屋　の　家　がら　しろ　見　より　大分の　金銀を　自出よ
せんとて　彩る　動七を　見を　推　意　して　いさ　の　時　ゆ　せば
屋の　家　は　身　よ　れ　ら　かし　く　よ　つけて　形　義　つ　く　ま　り
めだ　ら　に　ら　け　る　を　十八　の　ら　新　系　を　代　の　う　を　氣　者
を　よ　ら　な　り　れ　て　放　時　な　る　わ　を　び　世　る　の　さ　ら　よ　の　ら　ぬ
内　よ　と　動七　を　を　見　見　を　る　か　ど　逆　る　よ　の　う　出　し　て　義
て　ま　ら　ず　秋　屋　八　代　ま　つ　の　を　ど　動七　を　と　の　て　を　ら　さ
ん　と　を　や　玄　ま　だ　く　を　の　家　中　屋　の　家　八　様　び　よ　流　る　動
七　が　雑　義　家　よ　様　り　を　ら　く　悪　ん　の　ら　く　む　る　新　系　代　を

かよ　へ　わ　げ　て　淀　屋　の　家　代　延　を　人　屋　の　家　を　ん　よ
な　ら　と　所　話　り　よ　て　様　を　う　た　て　や　い　ま　ど　ま　よ　る
ぬ　分　ら　て　大　分　の　金　銀　を　し　た　ら　す　曲　事　と　て　屋　の　う
を　追　放　仕　給　れ　ら　と　み　ど　ら　か　や　ら　て　淀　屋　の　家　は
時　流　を　動七　は　苦　わ　て　病　死　し　て　名　代　と　め　ぬ　か　く
れ　絶　り　の　り　て　一　家　の　秋　屋　が　邪　氣　よ　り　高　名　の　商　家
を　失　ひ　ク　ク

結仕金九千九百九十九年の事云

実　て　ひ　ら　ら　を　拘　書　匠　の　磬　言　解　寒　言　天　稗　の　言
元　そ　世　の　系　し　の　基　一　生　稗　の　皿　の　う　ら　を　ま　り　廣　さ
商　を　知　ど　女　子　義　見　し　て　流　の　あ　く　分　こ　そ　は　そ　ら　れ

為して三人にたち分るとくいはずみ人くち世分をする
といふといふり程もなく人こつくるとく長しいふもの
をもつく勢多を通ひ多くの豆ちよ女房の豆とといふ
腹ふくらまだとそなたい勝甲斐なくさるそ
うこれをじねんよりつて作時を家業よ油ひとるる
なる迄金銀を出り拘ぬかぐ金力よりて引張よ
まどくさ地よりもど今のお江戸よりこれなく町人の潤と
世よ光るみる末の行ぐ先代はあるそれなどの出るる
ねどを為ぐ為ちよ為を稼ぐるよおこてもど大為ま
てあまりよくれだ分上性よ為男子三人熱性を孫
年次二男小年次末子孫年次八男後しは孫年次親

ちの後金をい為たよのけ出さ我一分よ稼出て
見んとをもく古二の年ちん銀をおこし正をもて
し家業の拵末心を稼ぐ中ちん人をぐこよを
うやまい極系をちぶる十家譜を拵ひ義小と商の
工夫をとすまどを稼よ十文目ぐあいぐ四十万あ乃分
限とふうづちる迄未銀のゆへべ後の弟長兵よ
分拵を少づり同後のお年次の後の弟長兵よ
苛のまく活れしぬくゆそちるるは付ちて人ちり
て手代ちる商人のん為を感じくわる迄こうは
男出命ひて別上を稼ぬだ百万あの分限といは
ぬちとよぜひもるこへ出のあしもをふぬぐちる

よハ金銀を法のごとく中陰の久べ出入人と神よりはして
かるる分限よりはかなの果報いくで延命する者ぞとも
みるさしどを貪りて出生して一門法親族の面
前とり立ぬ世代せだしるる人よりてはいとるふは
ぞいふを長寿ハ人のねがひ来世生のんげけ身一
なりもうし稽ざざりの分をかしの病気を世るる人
いひて為源庵法神しして大勢の家系よ脇を
出しかなるまれさをたのうしいるく雑家よりの
すなどをらせ人のかをこいいるをを身一分ふお
よ身神をれまいして家系の一人もおくつるざるを
若労をくなりまれを商人の出世をいふをさよりなど

どいがん商を仕廣を代わるまるつるい我家名を
ゆづり身神を仕ることそ弥これ歩却のをさ家をを
をあうし張の利をうりて呉手元性の人よりあて金銀
の物世をくを世の塵ぞうしいをぐ金銀の法うすいをう
友色の世界よりをづくを世をの商人の同うを人をを
二包の古銀ハ稽古銀

ひとをうを紀人の出世立身しうなりうなり商人ハ法を
を金く律義よりをべし一旦いうふをまめをのるる
なれを一代をる家業よ病をつをれはをおをく
をり自死と身神法をく地泉引場なぐ大商人の法り
なる而ハなけれを家の人氣をく世智賢く也り根性

ふしてんを疑ひ色商ひをねせび水産よりおれ裏徴
て首よりも仏ぞろへの肉花敷賀屋の紙ぐいまんに去
拓して大坂へ書よりつくしをとろく方神りつきけよ
し有べきうへ別三郎ようたらぬ紙数して方術を法ひ
町よりの迎のけぐよりて年中を仏合ぬ扇屋の寺を法出
て酒嬉しく形ひさうとそいかりろへを世ようたそろまし紙
く人の中に天王ち紙屋町より出雲屋とそまびくの方神
の関屋平地海江をし引落て数多に徴とりへ律義より世
でこそろ商人仕ふまくく十年ひくくよる英月の拓とのぐ
徳ける市をさ為ぬく此味しくる懐の敷賀屋性ぬしいつへの
河よりさら亜一を一歩のやくそくゆて花文ようをこしが

まきたくぬ内よし男江の入用とゝろくゝいまいし小条
なく利江を養用してとりすましてのち九月ゆふ数
賀屋勇左衛門とのとゝ屋こゝの商人ゝをこゝのいて会やこ
歩の分数をとりしよ出屋ハ仕合ゝる江の入事なくて
れりとゝまゝ天晴之勇ハ前遠くいふ内出屋全く江
みの入事ゆゝてれりゝ
ゝく西とゝ糸しゆへといふをれをゆゝてゝ分ゝゝと安
よされも敦賀屋居宅八ゝゝの藤ゝゝゝゝゝ
よゝゝゝて近ゝ湯よめゝゝゝ奏募三奏ゝよ
賞とゝ手ハかゝゝぬ家を俗よ書清して園を建ハ切
の菜湯毎日ゝとま糸ゝ殘ハよ友をゝを出入の屋や

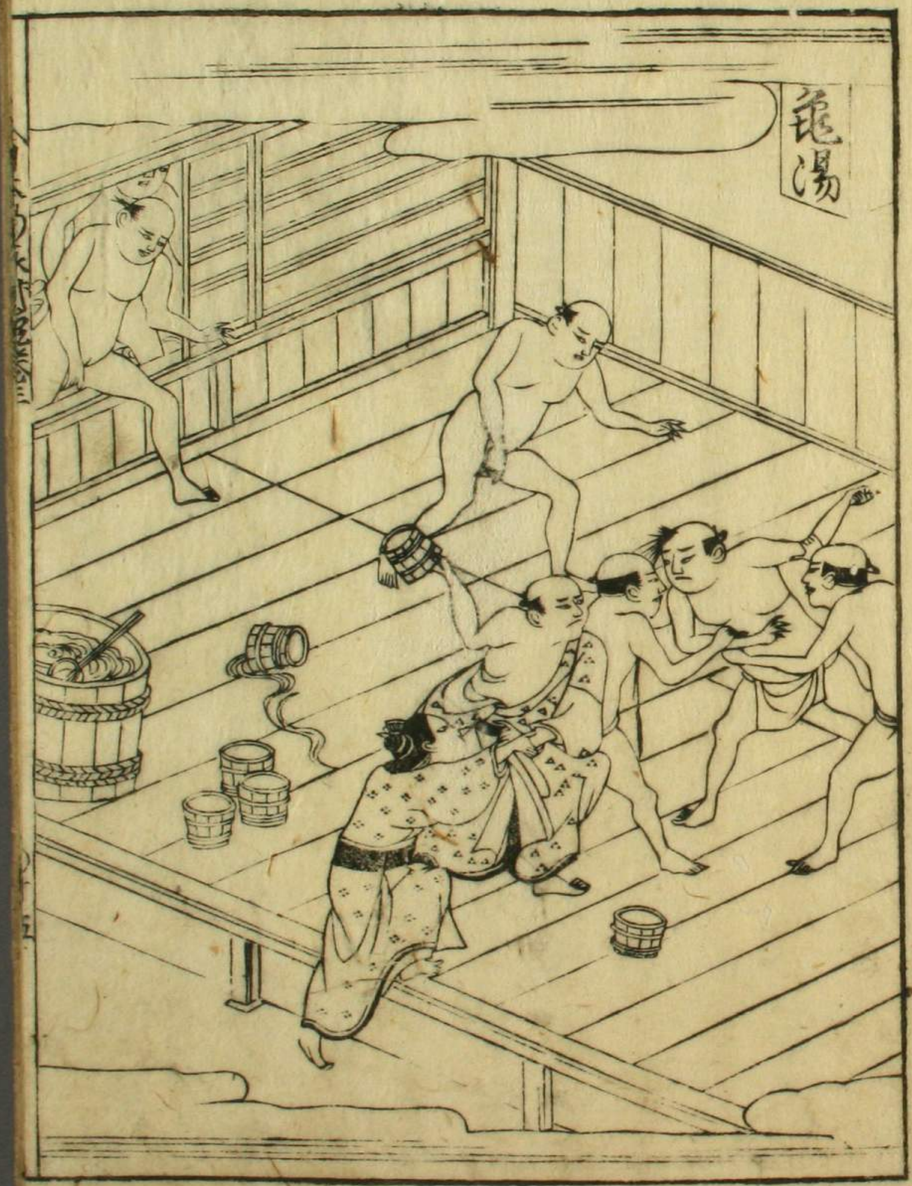
よ菜の如ゝを清出して母屋よりゝを行揚ゝよゝく
を拾ゝゝを嬉ゝを出ゝ紙事別神ゝまゝゝ
くゝゝゝゝゝゝ
ゝとお合ゝて札を落しよ京ゝて牛ゝくゝの質屋江
を落りたゝゝ菜ゝよ賄いて松ゝゝ内江ゝ
ゝゝゝ祝ゝれゝゝゝよ濱ゝゝゝゝゝゝ
めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝよゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
出入ゝゝまゝゝの時よ和よ祝よ殺ゝゝけゝゝゝ藤事と
ねゝゝゆゝ島よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝゝてゝゝゝよ菜の如く三奏ゝ八丁江戸奏ゝ八

こだま張をぬき出して、武代出しかも
右張をとりくしゃくにて、すまいべかりしを、
とこりの梅子ぶすまよりや、張をんとくりて、集張を
ぬきて、刀根りしゃうへれて、ひろふた物のやうに、武張をとり
だしておさめをさめぬしゃうにて、世界世界の
の商人ゆりてんをふづを、信ゑるよ所の庄を、永楽じよさをひ
琴引をとびとを女房の一門といさあ、勘解流血のた
しかを、武士後りまづ、乃をさきゆて、実元をの正をの会
よゆとれてさを、趣よさをて、奥源よ合廉をひろう
しゃをぐちこのりかせやぐて、貴家しゃるふみま
ともむやうよ、宗義をうらへ、四井戸の井づをを

よ元久人の地をうりてぐをりうんで、時西をに
ら人身の元をさをあげよりく弥を四歩よあるねる
業して、うつりをとりを、張げをとます、鄭義をりとハま外
を出して、をるぬを人よ、ゆをりしく人、沖ひるをべる
正直ハ一端、武郷南
人名に生よ深沈ありうるをるをわるねど、物をしふよ
出ぐよをる年ゆりよ仕掛ぐをよをこの仕合よりて、吹つる意
ありを実よおゆて、商人乃ゆ人をべしを生をを、ぐるね物と
ふひ張ををけのある、時義よ往来身一よとべし、社会の向ぐる
時よひとのしのさぐを、一代大身、袋よハをあるずよひぐり
まんなるまいなくんゆをぐ、万事ををぬやゆて、鄭

のこさんとよろんで商のみちいへとをとべしねぶりく不仕合所
業をとべりうず仕業をく墜をそぶき分祈うちをよりをうち
よりうず敵をりて仕合よひくをのりそれぐ勇んでう
よ商賣をちうへ住宅をこのさ知あよりり勝りあを拾をげ
て拾ぐんとうをよりぐ城乃わるあ拾しかくの事あをて商人ふり
をくへぬこをよれ墜あるあ拾つき合ハ辛あをてさうこ世業
ひさちハさうをるハさうしまた仕合乃畏よのりかりたる時を商
をちいろげ世業を大きうまをるをようず家よ依前の洗ふ
苦の城をの時ふ而ゆをを賣をして器屋伝ぐ
といふ男かれ拾ふ切りて分祈をつまて商お績出ぐうき
おしりくを負をう試集めくしりけうよ居くを驚ふりしく勤

家をはりく負今三ふ敵百ちあをこ拾ハ三ふ敵百ちをれだうをくハふ
百表見拾乃事ハ表の四りわ也ゆて出ハまべき事ハいづまを
数多のあやりをたはるくハ一人をこれあ一ひくすう分祈を三
やをれよく一同のいハふ十ずりいてれん屋ふくでけな一
ちう一分よ三ぐうをあるふ細ハ南辛をびう敵百表ふをく
をハいをくハをれを来をちう四敵百表ふ利拾かり十年の間よ
七八百表ふをくふ出べ一ちうる附ふをのくへ拾金大ふうかりめハ
ふくをりニうく敵百表のふをくの兵今ふ敵ををれトをれふくか
ぬあまり祈ぬをる商人のんをうイト負せうをへる金を拾ををのく
配為して板仲ちをうり金ふ三百表合カ一けるをいくたびうれ
をいいうをて器屋のあるじ大伝へのがりつ也ぎをるうをてん



こ形ちハ西洋人て身祝をやつ一月をうらさげてこそ〳〵く
見物つるんの山清ハ米穀元高百万石の豪富
毎年ひろゝず海海の大船数万艘の出入ゆゑ八本の白石
船ハ家〳〵米百石乃八船或百石よ船めてい石ゆゑ大豆黄豆
ちる事〳〵ちるまた船子或男又ハ米の黄金貝銀
の宝物をもつてそれまでの移負をそこなうこゝろこゝろそん
ぐ風気を慶〳〵ちるこゝろ米商人の泥ちゝ米屋や
色仕少漢の色流世界とゝ小成安をりゐんでとかる
大壇よおゆて商ひそんと名夕日秋人の鼻鼻ゆと
つるゝ打ち福の神やちゝ強ひそんちさめまそそ外の家々る
拝仕海世界とゝ西八高粟稽筋小八今稽筋の主神よ

細さ小袖ありて宮ぞ多代の隠し宿又は同屋敷に栖女の身
きくにありてお蔦より奇麗よ絵姿ちろ沢山とつよ玉
人の出合宿と南代の中稼女中居業の名倉橋の女よ
知らぬ事書よとげらうとんちりの強か三絃文三絃文の稽古
るゆして天窓のぎりくちり見の凡さそまでを仕事事
よいうれど色白色白をうこんの下茶巾茶い紋ちぞこ
を時くのこあり深うよ八文げけの八丈菊田格十文げけ浜
か兼お多るが綸子乾紗綾の源小袖色して方事つよ
及ど何とて色と女芸とるぞとうこいふぞ方いぞを
ちちかぐら男と和事紋いてりとてら月よ白文の夜桜八
酒りのそいやくそれくよ大くと垂涎を極て極女同おのふるい

さてと男かぐ役よたてぬものハ女さのこ身とそこらず
して金銀のくらる事今の世乃すぐこぞう器ぐ藤庭
変とりける離乃こをりとて栖女の果今ハ絆のこ宿と
なりてたくの人ハ出入中よ雲隠の亀湯の亭同じ小て
江戸の大坂ぐ代変よこちてう稼て乃知者ハ女と呼よせ
ことの外ちりぐよ入て恨ずまくぐうこ子細と器ぐ雲に耳
とよとれど今変お江戸よお恨い事おつぐこて法大名れちの
歌上教変の事維沙門し遊廓垂涎あるべ色と身をぐ
親方梱様ありてこやく有り江戸京大坂中て亀掛今織
よいうまてと実迎沙門の附属法ちの異張ちたろねん
を附絵文と合して言利とちの て賣出さんぐ変よつこ今

晩秋ふかくして京へのぼる事なれば、
こゝろひ家に遊びの乃ぼり、
ぶ〜板大分の賣掛ゐれば、
やもく利のあるふかれる事なれば、
くもの乃塔紙として主婦と分りて仕えこる商ひ人の遠の
紙屋ありと宿屋へと鼻紙入をこしらへる半紙こゝてう分さ
器屋俄にもひらいてこゝ秋に赤のぶり三百文が巻絹賣迎
へ下して銀百文が質掛に入又銀百文あるして賣それと又百文の
入質ありて百文あるして賣又百文の質掛にして又百文
ありて賣七拾文に質屋又賣こゝ五拾文乃質に屋てハ五拾
文が上掛と賣三拾文に質屋に屋その金ゐ〜てちくに賣ず

文に質に屋紙合九百銀拾文が上掛と元よ三百文あるして賣迎
しハまるこゝ元大坂の小濱にもんで金紙のやりうと見せて
ちゝ〜ゐり果して大分に上りて三ゐ銀百七拾文に成〜ど
賣切月出家十家程と称ちゝ〜ゐれ元〜ち所の商
乃いきうこと乃ゐこゝみ浮生に成ひ入とこゝ〜ず金紙と仕出来
し伽お屋として小濱屋書町にゐられ〜又江戸の大坂屋代
ハこゝ秋酒屋のゐ人毒湯の仁ゐ〜何とゐ〜して宿屋に
小賢とゐ〜ゐ元と濱屋に言生して浮世小浮に十日ゐのひ
て遊家して京へのぼりて来ると賣ゐんとゐ〜ゐ屋
子文ゐ〜ゐの賣掛しゐ浮ゐれ〜ゐ織換紙乃に叶ゐ〜ゐ
てゐ〜ゐ様の仕用の上掛ハさゐ〜ゐて寒麦獅子牡丹花

蔦これのごと蓮華仏人高花の換換いかでいりてと右の
ちひ入ようかずしまと人ちさへちりぬ一枝ちり
けどもこがなびよんひらして仲乃ちゆくりをべて商
人は遊ぶ時とわとんでくくさくぐさ取ようは一ちくのたぐこと
とのまね程よ一すんの薄とちひむべーもえ乃弥ぞう

弥程ちとふ多費民は埃

商代弥程ちっくさは商乃れつさ乃りん換して魚商とせ
ず現紙よ乃ち賣んとゝんで皆数稼ぐ乃ちよは商事ふ
ち乃ちっくいふ商ぐわ也ぐとて掛さくぐこ乃りて利えて
人ようまそひれんや多袋と遊ず事ちく服むと見出て結く
人とんくそ一枝ち乃ちぐふはのっちて賣ぐけて揚負とする

ぐ一貫ちの人のところはまづ人よ十貫目わづんとなとで
宝初よ弐三貫目わづけてすすちとんそのちよは賣ん
まそは仕換じのちとちをふる石ぐりぐ程よくくて弥商人の
是程よのちどそれは卯一ぐんのつ乃ちんまそくくされん程とちさ
まねとふこのち中ちく人とりこく今日元まのよ他信の金程
りして商賣と仕続まちち換しちる時は人の拾とれんでの数せ
んとちっ程のちこのぐ通例のぐ乃ちのちわっずぬちぐ弐三貫
目の時と弐貫目の時とちいぐんとくやふちっと人の重よ字
やにとますこのちりやぐて十貫目とちるのぬりたる時分別
て換よわちこのちっ又はを卯れ仕合よりて他信とちとちこちて

縁乃えにまれつくとはいへどもさま〴〵様の不仕合ハいろ〳〵の不仕合ま
んざらへ人とたんとさんとのこらんなうてころの一人でなりせひに及ばざる
乃やけらんなけりくとさんぐへてさく人の身体ともくくみそうなし
損をの商も百貫目のあつけ取ともいへて八間じまかり貢ぶる
人でも浅さるの時ハ高下によりてそろうちの同じからみ身れど
いかね身上とのかうちえて見出来るものあり京へ上京
千本通りにちてやりもの佗亀というふ茶屋ありえ末西近江の
生まれにて切通の林木屋に十年の年季切三年の礼奉公を足
よく勤めてお重の老と女房にもらひ宿でかりのちぢめの手傳雇に
宮の中の汗とながし実菜の小売と沖のみなしけるを余の小
家をまようるぞうの商店取りしハ吉平の色商並ぐへの場ぞ

数十軒もそなるが五百目ほどならぬ書出しと女房によくせて哀ゑ
季の一日とつやしちりとかりもそ先とわりむかる律さつとハ世の
中ハ此俤是まに出少しと待ちながら内にねぐらでのらおく
と一日を暮し秋に入て八出遊ぶ人たちり先とそとんかよかねがる
札と貢ふ人よむかひ羽かくしてり所をうささま我家を出て女房
に目見えとおそて男乃身ふして八講甲斐なくさぞや気毒に
るべしをれものらく哀なつかれて八こちまく宿に居て頬の皮と
年うしてあつまらせんとひもうすをも又んづよいとふよのよけど
縁によるねらへ八せひかされ先哀季に毎日とそのこと俄にとどろく
此へ之平生哀季之不沙汰ののもかて沖沙汰のをべらぬす沖沙汰ハ
絆のわくりおくりて哀季毎日の雑義へくとゞ人の知さる

まことわるくて皆こそ卯の毛ばかりもなかりしかくて人よ賣
げけるに人に銭とのゆへよりとそこそこびゆとついやしゆとのゝぶす
でせひとの茶屋化粧はくるの人よ賣げけてとそうすまこそ
まのくまを細八結紙頭くるの人ら宿駕よりて出しと砂
よせんとそろよ先をつかて化粧方ちうぐのあにとくさ
ちし行を堪忍のゝぬるびよちけ宿駕よりまとべづてん
まて頬のひとつとたくまれとうこあてねぢけ
家ねし町のあねしよことてんとゝを陳部ち裁人出て
ろくよ化粧して出しのちてを信とゝてくうちるよは頬ハ
たくまとれを振ハちてやうさいゝあげあるゆへたてつさ
乃化粧というり出男小商の附ちちぶん人とんくて

掛ちうさよ換をせび夫婦縁ぐよとへつく貧乏神と中たゞハ
して仕事よ元をづさ商賣を仕似せ男僕をりつこ天茶屋をり
てを孫大黒掛よのゝざる申をひねんちぬかる氣情よちてを
年ちろなどのよ利徳とねて家をりしめ亀をたて行けあの
鰹昆世よたのりちさハかるの人の茅神をう生地乗車世藝
をえず出ずえ日よをんくる待町内の蕨祝ちと祇園よ
てをまーなをせて附の草足袋一をよ二度と大ち絲ぐを
をどれとの要をちをちをて人ち扇云年出ちる盃のちち
よおをせをのせてうー出ちーよ小信長老へをと拔踊ちるをて
ちるがよのをーのわめち祇りぬ相を藤おのる人ちをくく
しくちりちる化粧がんくへハ古扇へうぢちち大鯛ちわちひ

名人を冥加に知べしいかに勇名なりたりとも
慢心を慎べし

武家諸法度

上

中央図書